母のない子と子のない母と

壺井　栄

913

壺井　栄

母のない子と子のない母と

少年少女講談社文庫　A－12

302p　19cm　講談社　1972

つぼい　さかえ

母のない子と子のない母と

少年少女講談社文庫　A－12

昭和47年7月12日　第1刷
昭和50年　第8刷（C）

著者……壺井　栄

装丁……岩本正雄

発行者……野間省一

発行所……株式会社　講談社

東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号 112

電話 東京(03)945－1111(大代表) 振替 東京3930

製版……株式会社　まゆら美研

印刷所……図書印刷株式会社・凸版印刷株式会社

製本所……株式会社　堅省堂

© 壺井繁治 1972　　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。

母のない子と子のない母と

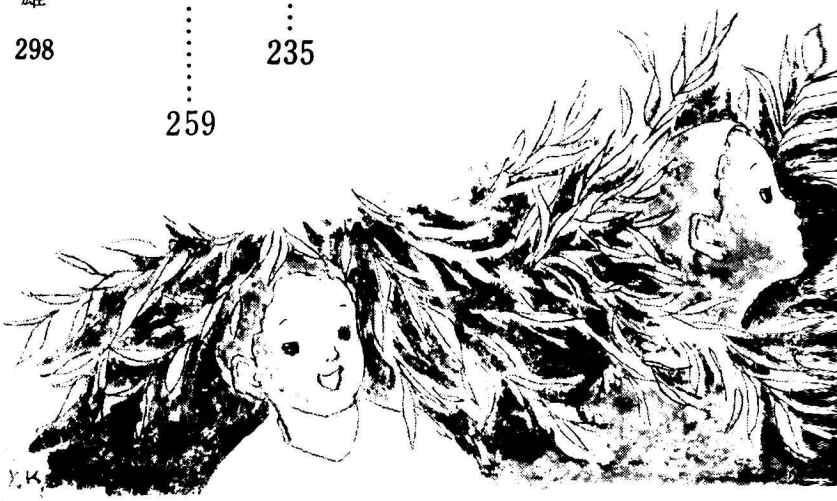
壺井　栄

柏村由利子・絵

母のない子と子のない母と／もくじ

一　オリーブにふく風……4
二　風の子……12
三　せりせり、ごんぼ……39
四　光とかげ……75
五　青い空……106
六　かめのきた日……129

七　みかんと、やかんと……150
八　誕生日……175
九　けむりのゆくえ……185
十　麦かり幼稚園……209
十一　母のない子と子のない母と……235
十二　「十七、八が二どそうろうかよ」……259
壺井栄の年譜……296
壺井栄と児童文学……関　英雄　298



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一、オリーブにふく風

小豆島を知っていますか。もしも、よくわからないようでしたら、一度、日本の地図をひろげてみてください。瀬戸内海の東の方に小いぬのような形をした、小さな島が見つかるでしょう。その小いぬはいまも、うつむいてごはんをたべているようなかっこうをしています。そのせなかに「小豆島」と書かれてあるはずです。

まるで、あずきつぶのように小さそうな名まえではありますが、かぞえきれないほどたくさんある瀬戸内海の島々の中で、小豆島は淡路島につづく、二番めに大きな島なのです。周囲百五十キロといわれていますから、それでだいたいのひろさがわかると思いますが、もっとわかりよくいえば、この島の中に三つの町と十三の村があります。ごく近ごろのこと(昭和二十六年の春)いくつもの村がいっしょになって、一つの町になったりしましたが、これからはじまる物語はそのまえのことになります。

小豆島は、神懸山(寒霞渓と)のもみじで人に知られていますが、もっとめずらしいことは、日本でたった一か所、オリーブがみのることでも名高い島なのです。

オリーブの木は、外国でも地中海にのぞんだ、あたたかい国にしかそだたないのだそうですから、小豆島もそのようにあたたかく、たいそうけしきのよい島です。

けれど、冬のあいだは、島じゅう潮風にふきさらされて、オリーブのやわらかなえだもゆすぶられつづけています。その風の中に、くるしいことや、たのしいことや、かなしいことや、うれしいことがくりかえされて、また春がくるようです。

あんなにひどい海風が、じつは、小いぬの島の足にあたる岬の山でやわらげられて、オリーブのそだつにちょうどよい風になってふきつけているときいたら、島の子どもたちだって、きっとおどろくでしょう。

これは、オリーブ園の近くの村のお話です。戦争がおわって一年ばかりたったころのことで、どっちをむいても、おとうさんのいない家や、むすこがまだかえってこない家がたくさんありました。戦争中、大阪や神戸あたりから疎開してきて、そのままかえれぬ人なども、だいぶありました。

これから出てくる、おとらおばさんなどもその口でしたが、なんといっても、おとらおばさんは生まれが小豆島でしたから、故郷へかえったようなつもりで、すっかり村の人になっていました。わかいとき、大阪へおよめにいって、十八年ぶりに疎開でかえったときには、もう親もきょうだいもなくなっていて、いとこにあたる西屋という家の土蔵の階下だけをかりて、そこでひとりくらしていました。

こういう人の中には、ときどき、とほうもなく子どもずきのおばさんがいるものですが、おとらおばさんもそういうおばさんでした。ひとりぼっちだから、ついさびしさから子どもをよせつけるのかもしれませんが、でも、まだ村には、ほかにもひとりでくらしている人がいますけれど、その人なんぞ、道で出あっても、子どもなんか人間でないみたいに、目もくれずに歩いています。

おとらおばさんときたら、子どものすがたさえ見ると、道のまん中でも大声で名をよぶのですから、しんから子どもをすきなのだと思わずにいられません。四十ぐらいなのに、子どものように、くりくりっとしたまる顔で、背のちんちくりんのおばさんは、まあるい目をよけい大きく見ひらいて、いろんなむかし話をしてくれたり、ほころびをぬってくれたり、バリカンで頭をかってくれたりするのです。ときには女の子のしらみがりをすることもあります。

そんなおばさんのことを、ものずきだとか、おっちょこだとか、なかにはお人よしだなどと、ちょっぴりけいべつするようにいう人もありましたが、たとえものずきでも、おっちょこでも、子どもたちにとっては、いっこうさしつかえのないことでありました。おっちょことかものずきというのは、きっと、子どもたちのすきなことかもしれません。

おかあさんのきびしいやさしさともちがう、おばあさんのねこっかわいがりともちがう、身内のおばさんたちの、えんりょなしの、むきつけいいともちがう、それでいて、おとらおばさんと話していると、ぴしぴしいわれてもなんだかうれしくなる、そんなおばさんなのです。

ちょっとへんなのは、おとらおばさんのとこへよってくるのが、おもに、男の子だということです。しかし、へんだなんていうのは、そのほうがへんなことで、もしもおばさんに、そのわけをきいたなら、おばさんは、きっというでしょう。

「男の子はあそびずきだからね。十さいになっても、のほずにあそべるんだもの。女の子ときたら、むかしから、なんじゃらかんじゃらと手つだわされて、あそぶまもなしさ。かわいそうに。」

それはきっと、おばさんの経験したことなのでしょう。しかし、そうはいっても、おばさんの心の中には、ちっとばかりわけがありました。おばさん自身は、このごろめったに口に出しませんでしたが、なくなったむすこの小さいときのおもかげを、子どもたちの中にさがしていたことです。おばさんは、じぶんがむすこになりかわって、子どもたちとあそんでいたのかもしれません。

おばさんのひとりむすこは少年航空兵でありました。終戦の前の年、土佐（高知県）の後免という町の兵営にいたそのむすこが、きとくだという電報をうけとって、おばさんはふだん着のまま、かけつけました。

しかし、いくら心はかけつけても、そのときいた大阪から土佐までいくには三日もかかりました。汽車にのり、船にのりかえ、また汽車をなんどものりかえて、やっと後免へついたのは三日めの夜でした。

防空演習で、まっくらな後免の町を、おとらおばさんは、きちがいのように大声でなきながら、二

度ほど面会にきて、知っていた駅前の道を、足さぐりで歩いて、いつもいく宿屋にたどりつきました。

そこには、ほかにも四、五人のおかあさんやねえさんがきていて、その人たちはみな、むすこや弟がきとくだという電報でやってきた人ばかりでした。おばさんのむすこたちは、はじめてのった練習機が故障のためについらくし、きとくの電報を打ったときにはもう、みんな死んでいたのです。そのときのことを、おとらおばさんはこんなふうにいったことがあります。

「――シシオー、シシオー、と、おとらが一生一度の声でよんでみたけれど、シシオは鼻血も出さなんだ。タイガーがライオンをよばわったのさ。」

ふざけたようないい方をしましたが、おとらおばさんの目の中はきらきら光りだし、なみだがもりあがっていました。おばさんのむすこの名は、なんとめずらしい獅子雄という名まえでした。これとて、わけがあるのです。

おとらおばさんが生まれたときにさかのぼらねばなりません。四十年も前のことです。村の中百姓の家に、月たらずの、あわれそうな女の子が生まれました。四人めにはじめて女の子なので、一家は大よろこびでしたが、いかにもひよわな赤んぼうを見ると、この子がぶじにそだつかと、そのおかあさんは心をいためました。するとおとうさんが、おかあさんをなぐさめていいました。

「おとらとか、おくまとかいう名にすると、たっしゃにそだつというでないか。この子もおとらか、おくまとつけようではないか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

そこで、おとらおばさんの名まえがきまりました。小豆島に、はじめてうえたオリーブの木がそだちだしたころのことです。そのおとらさんもぶじにそだち、年ごろになり、そして大阪のくすり屋へおよめにいき、そして子どもが生まれました。母親似とでもいうわけなのか、せっかくの男の子が、月たらずでもないのに、ふつうよりもずっとずっと小さかったのです。おとらおばさんは、おとらおばさんのおかあさんと同じように案じ、子どものおとうさんに相談しました。

「じょうぶにそだつように、虎雄か熊雄とつけましょうよ。女の子のとらやくまはすこしはずかしいけれど、男の子はげんきそうでいいから。」

じぶんが、ときどき、はずかしい思いをしたことを心にうかべながら、わかいおかあさんのおとらさんがいうと、薬剤師のおとうさんは、ちょっとばかりへそをまげて、

「そんな人まねするくらいなら、いっそのこと獅子雄としよう。」

こんなわけで、おとらといい、獅子雄といい、ぶじにそだち、しあわせにくらすようにとねがう親心からつけた名まえでしたが、戦争は人間のやさしい思いやりになど、すこしもとんじゃくしないで、たくさんのわかいいのちをうばい、たくさんのおかあさんや子どもたちをなかせました。おとらおばさんなど、むすこばかりか、大阪の空襲では、つれあいのおじさんまでうしなってしまったのです。まだそれほどの年でもないのに、おばさんのしらががきゅうにふえたのはそれからです。それいらいおばさんは、ずっと小豆島にこしをすえています。

生まれ故郷ですもの、もうおばさんはどこへもいく気はないでしょう。もしかしたら、なくなったおじさんやむすこのことを思いだすのがかなしくて、おばさんは大阪へいかないのかもしれません。ま四角な、かべばかりおおい土蔵の中で、おばさんはミシンの内職をしたり、大阪からとりよせたくすりを売ったりしながらくらしていましたが、子どものこないときなど、おばさんは、まるで、風の中からなにかの音をききだそうとでもするように、じいっとしてかんがえこんでいることもありました。でも、そんな顔を知っているのは、土蔵の中のかべばかりです。

二、風の子

二八月は風の季節です。ことに二月の風は、ぼんやりしてるとふきとばされるほど、もうれつでした。ピューと、ふえをふくような音をたてて、一日北風が、電線をゆすぶりつづけています。風のしずかな日でも、じっとしていれば、首のまわりやそで口や、ズボンのすそを目がけて、刃物のようないたさで、しのびこんできます。それをはらいのけるには、かけだすことがいっとうです、ぼんやりなどしていられません。

子どもは　風の子
じじ　ばば　火の子

どなっているのか、うたっているのか、とにかくそれで、冬の風とたたかっているのでした。海からふきあげ、山からふきおろす風と風は、もみあって、うずをまいて、なにもかも、もみくしゃにするのです。そのつむじ風を、まいまい風と、子どもたちはいいました。木の葉も紙くずも、浜の砂ま

でもふきあげ、ふきとばすまいまい風に、息をつめ、目を細めながら、子どもたちは前こごみになって走りました。

子どもは　風の子
じじ　ばば　火の子

それはげんきな子どもたちの合いことばです。寒がりのよわ虫をわらうときにも、これをうたいます。人にうたわれるとき、それははずかしめの歌であり、じぶんでうたえば、じぶんをきたえる冬の歌です。

「ほい、ほい、火の子かよっ。」

かぎ屋のひとりむすこである史郎は、学校からかえるなり、おばあさんのこたつべやにもぐりこんで、たぬきねいりをしているところを見つかり、ゆすぶられました。

昼間、こたつにはいると、かぜをひくからといって、雨ふりでもないかぎり、ゆるされないことになっていたのを、だれもいないのをいいことにして、ぬくぬくと、もぐりこんだばかりだったのです。火の子かといわれてぬけ出したものの、あてつけにねこのホーをも、いっしょにひっぱり出し、ドスンとたたみの上にほうり投げておいて、へやを出ながら、

「ねこのほうが、ぼくより、かわいいのかよっ。」と、にくたれ口をいって外へとび出しました。まだぬくもらなかったとはいえ、こたつべやから、まいまい風の中に出てみると、寒さはいちだんと身にしみました。

「子どもは、風の子！」

やけな大声を出して、じっと耳をすましましたが、それにこたえる声はなく、史郎自身もまた、あとがつづかず、風の中にかたをすくめて、しばらく、ううっとうなりました。

「じじ、ばば、火の子っ！」

もう一度どなりましたが、声はまいまい風にさらわれて、どこへもひびいてはいかないのか、やっぱりそれにこたえる子どものすがたはあらわれず、ドドー、ドドーと波の音が村じゅうをつつんでいるようでした。

沖を見ると、波はあばれて、白馬になって走っていました。こんな日には、だれだって家であそんでいるんだと、ふと、こたつのことをかんがえようとしたとき、松よ門（門ではなく、松よ門という名でよばれる家のこと）のかどから、一かたまりの子どもたちが走りだしてきました。笹一もいます。達雄もいます。みんな手に手に風車をもっています。

「あ、おとらおばさんなんだ。」

史郎はひとりごとをいって、じぶんもその方に走っていきました。松よ門のうらの方に、おとらお

ばさんの家はあり、おとらおばさんでなくちゃあ、こう大ぜいに風車をつくってくれたりする人は、まずないことを知っていたのです。あんのじょう、茂が左手をさし出しながら、いいました。

「史郎ちゃん、これおまえんだよ、ほら。」

それはもう茂の説明をまつまでもなく、おとらおばさんが史郎にもつくってくれた風車でした。なんのことはない、古いはがきを折って卍形に組み合わせたかんたんな風車でしたが、こんなうまいことを思いつくおとらおばさんが、子どもたちにとってはうれしいのです。おばさんは、みんなの名を、それぞれの風車に、赤えんぴつで書いてくれていました。

風車っ　くるっと　まあわれ！

かざぐるまあ　くるっとまあわれ！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c